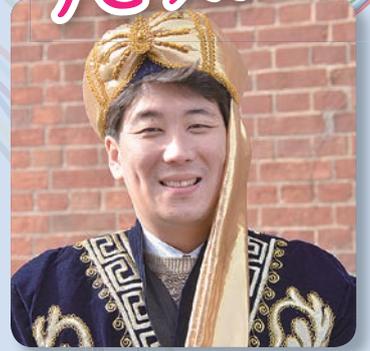


まいづる
元気人

ウズベキスタンと舞鶴の架け橋に

国際交流員
レ・アルトゥル さん

昨年の8月から、舞鶴市役所に国際交流員として勤務している、レ・アルトゥルさんにお話を伺いました。1983年生まれの34歳。出身は中央アジアのウズベキスタンの首都タシケント。2020年の東京オリンピック・パラリンピックでは、市がウズベキスタンのホストタウンを務めるため、両国の架け橋として文化や歴史を市民に伝える活動をしています。

サムライに憧れて

日本から遠く離れたウズベキスタンで日本に興味を持ったきっかけは、子どもの頃に見た、黒澤明監督の映画「七人の侍」だったそう。最後まで戦い抜く姿、武士道、武士のいでたちが強烈に印象に残り、サムライスピリットに魅了された。日本への興味は尽きることなく、タシケント国立東洋学大学の日本語学科で日本語や日本の文化を学び、ついに憧れだった日本に留学が決まる。最初の来日は2004年。10月に来日した時のキンモクセイの甘い香りが今でも鮮明に記憶に残る。

子どもの頃に見たサムライの印象が強かったが、実際の日本は、とても現代的で便利。アメリカ的な雰囲気、想像していた日本とは少し違ったそう。当時、ウズベキスタンでは珍しかった自動販売機が、まわりのいたるところにあるのに驚き、温かい飲み物が出てきた時は感動したという。1年後に帰国し、ウズベキスタンで日本語を教えていたが、2010年に再度来日し、早稲田大学院で学んだ。

舞鶴での生活

旧ソ連時代にウズベキスタンにも、日本人が抑留されていたこともあり、舞鶴とはとても関わりが深い国で親日国としても有名だ。昨年8月に初めて東舞鶴駅に降り立った時に、引揚棧橋のパネルを見て、やっぱり舞鶴は特別なまちだなと思いい、抑留者を温かく迎え入れた歴史を感じた。ウズベキスタンは国境を2回越えないと海まで行けない国なので、市役所から海が見える日常が気に入っている。関西は関東よりも人との距離が近く感じている。ある日夜遅くに道に迷った時、「家に帰りたいので道を教えてください」と歩いていたら男性に声を掛けると、教えるのではなくて家まで15分ほど一緒に歩いて送ってくれたことがあり、本当に人が優しくて親切なまちだと感じた。

交流員として赴任して6か月。職場のスポーツ振興課では、東京オリンピックまでには舞鶴とウズベキスタンの交流を深めるための市民との交流や事前合宿の準備などしている。職場はとても楽しい雰囲気なので、仕事が多くてもやる気が出て頑張ります」と話してくれた。

見た目は日本人のようなアルトゥルさん、何か困ったことは？と聞いてみると「困ったことはない

ウズベキスタンについて

最後にウズベキスタンについて聞いてみると、中央アジアというアジアとヨーロッパの文化の交差点であり、昔から侵略されてきた歴史があるため150以上の民族が暮らし宗教もさまざま、それぞれが認め合わないと成立しない。そのため忍耐力があがり、とても友好的な民族だという。「日本人の顔というのがありますが、ウズベキスタン人の標準的な顔はないんです。アラブ・アジア・ヨーロッパ系と容姿もばらばらですから」と答えてくれた。

ぜひ見て欲しいのは地下鉄で、駅によってテーマがあり、まるで王宮のような駅や宇宙をモチーフにした駅もあるという。

今年もほとんど市民の皆さんにウズベキスタンの情報をお届けします！まちで見かけたら気軽に声をかけてくださいね。

まいづる
花図鑑

ヒメカラヤ 中国・台湾に自生する常緑低木。江戸時代に渡来し、庭などに植えられている。高さは一メートルくらいで群がって生え、葉は奇数羽状複葉で鋭い鋸歯があり、先はとがり光沢がある。葉柄は無く、表裏どちらにも無毛。早春、茎の先に小さな黄色の花を穂状に付ける。夏に熟す果実は黒紫色で白粉をかぶる。

名前の由来は、鋭い鋸歯があるので触るとヒリヒリと痛み(疼き)、姿がナントンに似ていることから。葉が細かく、花が秋に咲くものをソソバヒイラギナンテンという。

【協力】瓜生勝朗
市文化財保護委員(植物分野)

ヒイラギナンテン
(メギ科)

見ごろ 3~4月頃

※奇数羽状複葉…軸に沿って小葉が両側につき先端に1枚の葉が付くもの

